合唱指導におけるパフォーマンス評価の在り方
―H.ガードナーのMultiple Intelligences理論に基づいて―

学籍番号：199358
氏　　名：山﨑 拓利
主指導教員：寺尾 正

１．研究の背景と目的

一般に音楽における評価といえば，歌唱の試験や作曲課題の提出，鑑賞における感想文などを思い浮かべる人が多いのではないだろうか。筆者も生徒だったときにこれらの課題や試験によって音楽科の評価を受けてきた。当時は，歌唱において他の生徒の前で歌うことに恥ずかしさを感じ，試験に嫌悪感を抱いていたが，それは自身の問題であると考えていた。しかし，音楽教育について学んでいく中で，「指導と評価の一体性」や「真正の評価」といった考え方に触れ，音楽科の試験や課題の問題点について考えるようになった。特に，合唱の試験に関しては，合唱の指導を受けたのにもかかわらず試験は独唱で実施されるという事例を知り，指導と評価場面の乖離性について強い疑問を感じるようになった。本来，合唱指導を受けたのならば，他者の声を聴きながら自身も発声をする中で，リズムやピッチを合わせたり，音楽による非言語コミュニケーションを行ったりする場面こそ評価されるべきではないだろうか。

そこで本研究では，指導と評価の一体性を前提とした，合唱指導におけるパフォーマンス評価について，先行研究の検討，自身の授業構想・実践を通して分析を行うことにした。それをもとに合唱指導におけるパフォーマンス評価の在り方を考察することが本研究の目的である。

２．研究の方法と概要

第Ⅰ章ではまず，これまで「知能」がどのように捉えられてきたのかということについて，先行研究をもとに検討した。次に，単一的な知能観と H.ガードナーの MI 理論における「知能」との相違を指摘した。ガードナーの主張する８つの知能説は，知能の多元性を論じながらも，それらが実生活では複合的に働くものであることを唱えたものである。つづいて，上記をもとに音楽において多重知能がどのように作用するのかということを吟味した。その結果，音楽は８つの知能全てを活用する行為であることが分かった。本章では音楽と多重知能の関係について探求することにより，最後に音楽を学習する意義についても明らかにできた。

第Ⅱ章では，はじめにこれまで行われてきた教育評価の問題点について整理した。それを通じ，多面的に生徒の活動を見るためには，より場面に適した評価方法を用い，指導改善に資するようなシステムを構築することがこれからの課題であるということを明示した。次に，近年注目されている「真正の評価」が音楽教育の評価においてどのように応用できるか，G・ウィギンズの評価理論をもとに検討し，それらをもとに音楽におけるパフォーマンス評価の在り方

について考察した。音楽の演奏を主とする単元においては，やはり音楽のパフォーマンスを捉えて評価することが重要である。ウィギンズの主張する「真正の評価」理論の通り，専門家の思考プロセスや実生活に基づく活動を評価するには，演奏行為をルーブリックなどの活用によって適切に評価することが求められる。

第Ⅲ章では，まず音楽における「認識」と「行為」の２つの立場について，先行研究をもとに議論した。ここでは特に，パフォーマンス評価との親和性に鑑み，「行為」の立場に着目し，音楽の行為性について詳述した。ここで取り上げた音楽の「行為の立場」諸説は，人間が「音楽する」ことの意味を捉えようとしたものである。＜いま＞＜ここで＞＜ともに＞行われる行為こそが音楽であるとする考えは，その行為を評価しようとするパフォーマンス評価との親和性が高いものである。つづいて，焦点を合唱に絞り，パフォーマンス評価を活用する効果と可能性について考察した。合唱活動をパフォーマンス評価によって評価するためには３つの方法があると示したが，本研究では少人数での演奏形態が最適であると考え，後に示す授業構想においてもそれを採用した。

第Ⅳ章では，筆者の授業実践を開示し，分析・考察した。その際に，MI 理論の「知能」を評価の観点として設定し，授業で用いるワークシートや活動の分析にもその観点を活用した。授業分析や生徒の記述などから，上記観点の設定は学習改善・指導改善に有効である。次に，その実践に続けて実施することを想定した授業計画並びに評価用ルーブリックを考察した。結果の検証はできなかったが，研究授業の分析から，上記の授業計画は教育現場においても実践可能であり，評価の改善，ひいては指導・学習の改善に役立つものであると考える。最後に，これまでの研究をもとに合唱授業の評価システムを提案した。これは，これまでの先行研究の検討を通して考えたシステムであるが，最も重要であるのは生徒に学びをもたらし，学習改善を主体的に行っていけるような指導を実施することである。結局，上記の評価システムを用いて，適切に生徒の学びを評価していくことを提案するに至った。

３．反省と今後の研究課題

本研究では，ガードナーの MI 理論に基づき，合唱指導におけるパフォーマンス評価の在り方について探究してきた。その中で，MI 理論や音楽の「行為の立場」をもとに，合唱指導を計画し，アンサンブルによるパフォーマンス評価を行うことにより，生徒の学習改善，教師の指導改善が望めることが明らかになった。しかしながら，（１）第Ⅳ章で示した授業計画について，全てを実践し評価の結果を出すところまで至らなかったこと，（２）パフォーマンス評価の課題設定におけるプロセスやルーブリックの活用方法に関する研究について，深く探究することができなかった点，（３）筆者の指導技術の不足により，授業計画の実践にあたって時間が不足し，十分な評価の検証を行えなかった点，以上の３つの反省点を残すこととなってしまった。以上の反省をもとに，まずは筆者自身が評価をする能力と指導力とを相乗的に向上させていく必要があると考える。その中でパフォーマンス課題の設定やルーブリックの活用に関する研究を今後さらに進め，より適切に生徒の学びを捉える評価システムを考案していきたい。